

# ノーメンクラトゥーラは どこへ行ったのか？ [I]

—Comrade Criminal: Russia's New Mafiya,  
by S. Handelman<sup>1)</sup>によせて—

鈴木 博 信

## ノーメンクラトゥーラはそこにいる

「ノーメンクラトゥーラ」というロシア語が、一党支配制時代のソ連のエリート層・支配層を意味することばとしてソ連の内外で広く使われてきたことは、よく知られている。

ただし、このことばを共産党一党支配下の「赤い貴族たち」といった「茶の間の用語」として使用するにとどめないで、ノーメンクラトゥーラという制度がどんな仕組みで運用され、どんな手続きでそこに坐る人々が選抜されていたのか、というところまで踏みこんで眺めてみると、一党支配制の核心を形成していたのがまさにこの制度であることがわかる。

そのレベルで定義された「ノーメンクラトゥーラ」とは、一党支配制指導部が、党と国家を一元的に支配するためにつくり上げた独自の人事任用・運営システムということができる。

どんなレベルで使用するかにしたがって多義化する「ノーメンクラトゥーラ」を詰まるところどう定義するか<sup>2)</sup>、は叙述をすすめるなかでこころみるこ

1) New Haven and London: Yale University Press, 1995. 邦訳は、スティーヴン・ハンデルマン著、柴田裕之訳「マフィアと官僚—犯罪大国ロシアの実像」(白水社, 1996)

2) 拙稿「ノーメンクラトゥーラ制覚書」, 『中央公論』1981年11月号, にかつて筆者のこころみた定義がある。

とにして、さしあたりは「ノーメンクラトゥーラ」ということばをソ連時代の支配層・統治エリートたちといった、「通俗的な」意味で用いながら記述をすすめることにする。

ソ連の国家組織は1991年12月に消滅した。ソ連共産党はそれをまたずに11月に消滅した。当然、ノーメンクラトゥーラも党と運命をともにしたわけである<sup>3)</sup>。そのプロセスの最終段階を、年表風に概観することからはじめよう。70年をこえる歴史をもつ一党支配制の崩壊過程は、ロシアの帝政がくずれさるときに似て、おどろくほどスピーディーな「自壊過程」であった。

#### 1991年—ソ連の党・国家消滅

- 7.23 ゴルバチョフ大統領、連邦構成15共和国のうち9共和国の首脳と、共和国の地位大幅向上をみとめる「主権国家連邦」条約（新連邦条約）最終案で合意。（→8.15 公表）
8. 4 ゴルバチョフ、夏の休暇のためクリミアのフォロスの別荘へ。
8. 9 ゴルバチョフの留守をあずかるクレムリンの首脳たち＝クーデタ首謀者たち、連邦を弱体化し「国体を破壊する」新連邦条約の阻止を謀議。
8. 9 イズヴェスチヤ紙などに「主権国家連邦」条約案。
- 8.16 ソ連最高会議議長ルキヤノフ（ゴルバチョフ大統領のモスクワ大学法学部時代いらいの同窓生で、大統領の盟友）、新条約反対の声明（→8.16 朝6時放送）。8.16 ソ連共産党の元政治局員アレクサンドル・ヤーコブレフ（ゴルバチョフの主演してきたペレストロイカ劇のもっとも中心的な「シナリオ・ライター」）、ソ連共産党から脱党。（→翌8.17の脱党声明で、クーデタを警告）

3) ノーメンクラトゥーラ制にたいする非難の高まりに直面して、形式の上では、党本体の崩壊に先立つ前年の1989年に、ノーメンクラトゥーラ制の廃止が決定された。

同日、「主権国家連邦」条約案正式発表。署名日は8.20ときまる。

### モスクワのクーデタ

8.19～8.21 「三日天下」に終わった「ソビエト指導部」のクーデタ。

8.19 朝6時のモスクワ放送：ルキヤノフ最高会議議長の8.16付声明，ヤナーエフ副大統領による，「ゴルバチョフ大統領の健康状態」を理由として副大統領が大統領の職務を引きうけるとした副大統領令，「ソビエト指導部」の非常事態にかんする声明，非常事態の管理にあたることになった「国家非常事態委員会」のソビエト国民への訴え，国家非常事態委員会の決定第1号，等をつたえる。

8.20 クーデタで主権国家連邦条約案の署名流産。

8.20 エストニア最高会議，エストニアの独立決定。（→8.24 ロシア共和国，独立を承認）

8.21 ラトヴィアもエストニアにつづく。クーデタはソ連軍と国民の支持を得られず，この日をもって「腰くだけ」に終わる。

8.22 ゴルバチョフ，モスクワに帰る。クーデタ組織者たちの出した法令を違憲として廃止する大統領令。

8.22 モスクワ・ジェルジンスカヤ広場（現ルビヤンカ広場）のジェルジンスキー像（ジェルジンスキーは，一党支配制を裏打ちする秘密警察〔発足時の畧称はチェカー〕の初代長官。ソ連の基本的統治手段である「恐怖」のシンボリック的人物）撤去。

### ソ連共産党解体へ

8.23 [ロシア] ソ連共産党ならびにロシア連邦共和国共産党の活動の停止にかんするロシア大統領令。（→8.23 両党の資産を没収・国有化。11.6活動禁止。1993.5.26 ロシア憲法裁判所，上記の措置について合憲判決）

8.23 モスクワ・スターラヤ広場のソ連共産党中央委員会の建物を封印。

- 8.24 ゴルバチョフ、ソ連共産党書記長を辞任。ソ連共産党中央委員会の解散を表明するとともにソ連共産党の自主解散を勧告。
- 8.24 [ロシア] ソ連共産党とロシア連邦共和国共産党の財産にかんする大統領令（両党資産の没収・国有化を指令）。
- 8.24 [ロシア] バルト3国の独立承認の大統領令。
- 8.24 [ウクライナ] ウクライナ共和国最高会議、独立民主国家を宣言し、ウクライナではウクライナ共和国の法令のみ有効と決定。（→12.1 国民投票で確認。）
- 8.25 [ベロロシア] 最高会議、独立宣言を採択。
- 8.27 [モルドヴァ] 最高会議、独立宣言を採択。国名をモルダヴィア・ソビエト社会主義共和国から「モルドヴァ共和国」に変更。
- 8.29 ソ連最高会議、ソ連共産党の活動停止を決定。
- 8.30 [アゼルバイジャン] 最高会議、独立宣言を採択。
- 8.31 [ウズベキスタン] 最高会議、独立宣言を採択。
- 8.31 [キルギスタン] 最高会議、独立宣言を採択。
9. 5 [ウクライナ] クリミア自治共和国、国家主権宣言。
9. 6 [グルジア] ガムサフルディア大統領、連邦と絶縁を声明。
9. 6 レニングラート、サンクト・ペテルブルクの旧名にもどる。
9. 7 [アルメニア] アルメニア共産党大会、党解散を決定。
9. 8 [タジキスタン] 最高会議、独立宣言を採択。
9. 8 [カザフスタン] カザフスタン共産党、社会党と改称。
- 9.14 [ウズベキスタン] ウズベキスタン共産党、人民民主党と改称。ひきつづき権力維持。
- 9.19 [ベロロシア] 最高会議、国名を「ベラルーシ」に改正。
- 9.20 [アルメニア] アルメニア共産党、民主党と改称。
- 9.21 [アルメニア] 国民投票で99%が完全独立を支持。
- 9.23 [アルメニア] アルメニア最高会議、独立宣言を採択。

- 9.28 コムソモール（ソ連青年共産同盟）大会，コムソモールの解散決定。
10. 5 [ロシア] 連邦国家保安委員会（<sup>カーゲーベ</sup>КГБ；KGB）を共和国に移管する大統領令。
- 10.12 ソ連国家保安委員会の廃止にかんするソ連国家評議会の決定。  
(9.5 ソ連最高会議は移行期の国家権力機関・行政機関に関する法律を採択，ゴルバチョフを長とし各共和国の元首からなる「ソ連国家評議会」を設けて，暫定統治機関とすることをきめていた。)
- 10.18 ソ連最高会議幹部会のさいごの会議。
- 10.22 [ウクライナ] 最高会議，共和国軍の設置を決定。
- 10.27 [ロシア] チェチェノ・イングーシ自治共和国で全チェチェン人大会。チェチニャ（チェチェン国）の独立を宣言，ドゥダーエフを新設のチェチェン共和国大統領に選出。(11.8 [ロシア] チェチェン・イングーシ自治共和国に非常事態実施の大統領令。[ここからエリツィン政権はチェチェン共和国の独立圧殺にのり出そうとしたが] 11.11 ロシア最高会議，大統領令を取消し。1994.8 反ドゥダーエフ派，暫定政権樹立。1994.11ドゥダーエフ派と反ドゥダーエフ派武力衝突。1994.12 ロシア軍，ドゥダーエフ派にたいする軍事行動「チェチェン戦争」を開始。1996.4.21 ドゥダーエフ戦死。1996.5.27 ロシア [レーベジ安全保障会議書記] とチェチニャ [独立派・マスハドフ参謀長] 間に停戦協定。1997.1.5 ロシア軍，チェチニャからの撤退完了)
- 10.27 [トルクメニスタン] 国民投票により独立宣言。
- 10.31 [ロシア] ロシア人民代議員大会，新国旗を決定。(新しい白・青・赤の3色旗は，帝政時代の準国旗ともいふべき商船旗。)
11. 6 [ロシア] 共和国の領土内におけるソ連共産党とロシア連邦共和国共産党の活動の中止および両党の財産の固有化にかんする大統領

- 領令。(←8.23 ロシア大統領令。1993.5.26 ロシア憲法裁判所、合憲判決。)
11. 7 10月革命73年記念日、モスクワで公式行事なし。(1995.11.7 [ロシア] 11.7を「合意と和解の日」とする大統領令。)
- 11.11 [グルジア] 領土内のソ連軍の資金の国有化にかんする大統領令。
- 11.13 [モルドヴァ] 領土内のソ連軍の資金にかんする大統領令。
- 11.14 国家評議会で、ソ連を国家連合に再編し連邦憲法は作らぬとのゴルバチョフ構想に6共和国(ロシア、ベラルーシ、カザフスタン、アゼルバイジャン、キルギジア、タジキスタン)首脳が合意するも、1.25に至って各首脳とも調印拒否を決定。
- 11.15 [ロシア] ガイダール第一副首相を首相代行とする「改革政権」発足。
- 11.16 [ロシア] 最高会議、みずからをソ連最高会議の合法的継承者と宣言、同最高会議の財産の接收を決定。11.19 ロシア政府、クレムリン・ソ連外務省・同内務省・<sup>カゲーベ</sup>КГБ等を接收。
- 11.22 [ロシア] 最高会議、ソ連国立銀行(ゴスバンク)のロシアへの移管決定。
- 11.27 イズヴェスチヤ紙などに、手直しした「主権国家連邦」条約案。連邦維持のさいごの試み。
12. 1 [ウクライナ] 国民投票で独立賛成90.32% (投票率90.32%)。

#### ソ連邦・消滅

12. 3 ゴルバチョフ・ソ連大統領、「わが祖国ソ連は危機に瀕す！」とテレビ演説。
12. 3 [ロシア] エリツィン大統領、ウクライナの独立を承認。
12. 5 [ウクライナ] 最高会議、1922年の「ソビエト連邦結成条約」の失効を宣言。ソビエト連邦存続の可能性、消滅す。

12. 8 ロシア，ウクライナ，ベラルーシ3国首脳，ベラルーシのペロヴェージで，連邦から独立した各国から成る「独立国家共同体」設立協定に調印，ソ連消滅を宣言。
- 12.10 [ウクライナ] 最高会議，独立国家共同体設立協定を批准。
- 12.10 [ベラルーシ] 最高会議，おなじく独立国家共同体設立協定を批准。(12.11 最高会議，共和国内での連邦法失効を決定。)
- 12.12 [ロシア] 最高会議，おなじく独立国家共同体設立協定を批准。  
(1996.3.15 ロシア国家会議[「下院」]にあたる。再生したロシア共産党など，反エリツィン勢力が多数を占める)，独立国家共同体協定の無効を決議。ただし，法的拘束力なし。)
- 12.19 [ロシア] 大統領，ソ連外務省の活動停止を声明。
- 12.20 [ロシア] 最高会議，ソ連国立銀行の廃止決定。
- 12.21 カザフスタンの首都アルマ・アタで9ヵ国首脳，独立国家共同体結成の議定書に調印。
- 12.24 ソ連にかわりロシア連邦，国連加盟国・安全保障理事会常任理事国となる。
- 12.25 ゴルバチョフ，ソ連大統領のポストを去る旨，午後7時テレビ演説。同7時32分～35分クレムリンのソ連国旗おろされ，かわってロシア国旗掲揚。
- 12.26 ソ連最高会議共和国院，国家・国際法の主体としてのソ連消滅を確認。
- 12.25 [ロシア] 最高会議，ソ連邦結成条約の破棄を決定。
- 12.25 [ロシア] 最高会議，ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国の国名を「ロシア」「ロシア連邦」に変更。(採決方法の手ちがいから2つの国名が成立。1993.12.12 新しい「ロシア連邦憲法」成立のさい，「ロシア連邦」に確定。)
- 12.26 [ロシア] ロシア政府，1991.1.2から価格自由化・商店民営化の

開始を決定。

12.27 日本，ロシア連邦を承認。

12.29 [ロシア] エリツィン大統領，市場経済への移行にともなう困難を忍耐をもって突破するよう，国民に要請。

以上の年表風摘記が物語るように、「一党支配制下ソ連」の統治エリート層＝ノーメンクラトゥーラに椅子と収入と特権を保証してきたソ連共産党とソ連国家は，91年の後半に一挙に消滅した。反ポリシェヴィキ陣営の貴族や将軍や日米欧の国際干涉軍はいうまでもなく，ヒトラー・ドイツも第2次大戦後の西側反ソ強硬派もなしえなかったソビエト体制の崩壊を，わずか3日間で実現したのは，ほかでもない一党支配制の帝国という「国体」を護持しようとして国家非常事態委員会に結集した8人のトップ・ノーメンクラトゥーラたちであった。

しかも，かれらを選任したのは，「改革による国体護持」をめざしたゴルバチョフ自身にほかならなかったのである。

\*

\*

\*

それでは，ソ連共産党・ソ連国家の消滅とともに jobless になったはずのノーメンクラトゥーラたちはどこへ行ったのだろうか？

大半は，勤務先の解体とともに歴史の舞台から下りることを余儀なくされ，年金生活者として生きのびているのだろうか。

それにたいする答えは，はっきりしている。かれらの多くは舞台から立去りはしなかった。

——かれらは，そこにいる。

#### サンクト・ペテルブルク市議会のノーメンクラトゥーラたち

こう述べたとたん，「……それは事実とそぐわない」と反論される向きがあるにちがいない。



曰く、「共産党一党支配制とソビエト連邦が崩れ去ったあとには、新世代のあたらしいエリートたちが輩出しているではないか。そこには、民主的反体制派のかつてのスターや脱党して党と絶縁した非ノメンクラトゥーラの名士も多数ふくまれていたはずだ。エリツィン大統領じしん、ノメンクラトゥーラの頂点近くまで上りつめていながら敢えてこれと手を切った英雄である。1991年のクーデタ挫折で党内の国体護持派が一時総退却したあとにかれが組織した新政権には、ノメンクラトゥーラの外からあたらしい幹部カードルが何人も登用されたではないか」と。

それに——と反論者はつづけることであろう。「ノメンクラトゥーラ層のなかに、政治や経済の現場にとどまったものが少なからずいる事実は、自分とてむろん否定はしない。

ソ連に存在した権力組織は党と国家が一体化した、いわゆる党 = 国家シンピ共生体制であり、党から多少とも自立したテクノクラート層は存在すべくもなかった。したがって、ノメンクラトゥーラを全面排除して、あたらしいタイプの権力組織をだれが一体案出できるというのか。だれが運営して行く能力をもっているというのか。それくらいのことは、いわれずとも承知している。

一党支配制の崩壊が外発的にではなく内発的におきたものである以上、つまりノメンクラトゥーラ層みずからの手による、国体護持のためのオーバーホール作業(= ゴルバチョフの改ベレストロイカ革)がもたらした「自壊」である以上、あたらしい権力組織をつくるいとなみは、主としてノメンクラトゥーラ層のなかの権力の座にとどまりえたもの、ならびにノメンクラトゥーラ層の眷属・子弟・その友人知己たちの仕事にならざるをえない。

占領軍が乗りこんできてエリート層の交代を強制するなり、反体制派が抵抗運動のなかで権力を担うべき代替組織をつくり上げるといった事態を一切欠くなかで進行したのがソ連崩壊の現実である以上、それ以外の選択はありえない。

しかしながら、だからといって、一党支配制が崩壊する過程で、発火剤と

して、また触媒として民主派が果たした重味を軽視してよいことにはならない。」——こう反論して、民主派にそれなりの讃<sup>オマーージュ</sup>歌を捧げる向きがあるにちがいない。

そうした議論を、むろん筆者も否定しない。

民主派の演じた一定の重味にみとめたうえで、しかし、そもそも民主派全体がどこまでノーメンクラトゥーラ層から自立したものであったか、となると、決定的な疑問符をつけざるをえないのである。

ノーメンクラトゥーラ層にはなんの「コネ」ももたない、いわば一党支配制にいささかも「汚染されたことのない」真の民主派や民主的・反体制派も、すこしは存在した。しかし、かれらとて一党支配制崩壊後のロシア政治のなかでそもそも意味のある影響力をふるいえたかどうか、その力量には疑問符をつけざるをえないのである。そのことは、ペレストロイカ時代に誕生した「純正」民主団体がその後たどった道が物語っている。

例証を一つだけ、あげておこう。

1988年8月21日。チェコスロヴァキア共産党の改革派がはじめたソ連型一党支配制の改革運動——「人間の顔をした社会主義」建設の実験——をソ連軍の戦車が圧殺してから20年にあたるこの日、モスクワ中心街のプーシキン広場で民主的・反体制派組織「民主同盟」の開いた記念集会に、当局がおそいかかった。28人の警官をふくむ多数のケガ人（市民側の被害者数は公表されず）が出て、96人が拘束された。3度にわたりくりかえし広場に突入し市民を蹴散らして、「社会主義的民主主義」とはどんなものかを例証してみせた内務省の特殊部隊<sup>オモーン</sup> OMOH も創設まもない新しい組織なら、弾圧を食らった民主同盟も、この年5月に産声をあげたばかりの「未公認の」政治団体であった。

たしかに民主同盟は「純度の高い」反体制派組織ではあった。これ以外のほとんどの「未公認」「非公式」の政治団体は、すくなくともソ連共産党内のゴルバチョフ派なりエリツィン派なりを支持する姿勢をとっていた。共産党

を無視しては、すくなくとも共産党内部の改革派の協力・支持を仰がなくては、この国ではなにも出来ないと認識していたからである。

その意味では、民主同盟はたしかに現実性に欠けるところがあったが、ソ連憲法の明記している市民の基本権が政府当局によってどのように守られるものか、ペレストロイカをとおして「法治国家」を建設するという共産党の公約実現能力がどのていどのものであるか、を満天下に明らかにしてみせた点で、大いに存在価値を発揮したことはたしかだった。

一方、ゴルバチョフ大統領にとっても、民主同盟の存在にはそれなりの効用があった。レーニン像を汚すような、「節度なき」民主主義者は断平として取締るという姿勢をみせつけて、党内の批判勢力におのれの正統性を誇示するよすがにしえたからだ。それに、ソ連憲法6条が共産党を「ソ連社会の指導力・主導力」と明記している以上、公然と党に挑戦する勢力にお灸をすえることこそ法に合致した、合憲的行為と主張できるというものだった。

当時、民主同盟の実力を値ぶみするため、トヴェーリ市（当時はカーニン市）で民主同盟トヴェーリ支部の幹部と会見したモスクワ・ニュース論説委員のセルゲイ・ロイ<sup>4)</sup>は、おおすじつぎのようにそのときのやりとりを回想している。

「ソ連共産党のような強力な組織を打倒するためには、強力な組織をつくる必要があるとおもうが、どうか？」

幹部の答——そう思う。

「歴史をふりかえてみると、あらゆる組織はおそかれ早かれ、例外なしに、組織自身の利益を追求する制度へと墮落してきた。公正な社会を建設する、救いを地上にもたらず、といった当初かかげた目標を高唱しつづけはするものの、高貴なスローガンをかかげることによって獲得した利得の保存・維持につとめることがじっさいの目標になっていく。

4) Sergei Roy: Very Democratic Union, MOSCOW NEWS, No, 14, April 10-16, 1997.

民主同盟が共産党を打倒できるほど強力になって共産党を打倒したあかつきには、自発的に解散する用意はあるのか？

共産党が消滅し権力の真空が生じたあとに居坐るなら、あらゆる組織が権力入手后におち入ってきた落とし穴にあなた方もまたおち入るにすぎないではないか？」。

答——その問題をどう解決するかについては、民主同盟の内部でも激論がある。あるものは無政府主義的な解決策を主張し、他のものは西欧型デモクラシーの採用に期待をよせている。

共産党という巨人もみずからを支えている足は脆弱な粘土づくりなので、まずこれを打倒するべきだという点ではわれわれは一致しているので、あなたの疑問は共産党を打倒したあとに考えればすむことだ、云々……。

ロイ氏は告白している。民主同盟トヴェーリ市支部のメンバーはわずか6人というのに、権力奪取後の基本戦略すら一本化できていないことがわかり、政治勢力としての「真正」民主勢力にたいする失望を禁じえなかった、と。

民主同盟は、現実感覚を欠いていた民主派諸勢力のなかでも極端な例ではあるが、ソ連の党＝国家崩壊後のあらたな政治体制を組織する力量を民主諸派がおしなべて欠いていたことはうたがいを入れない。

時とともにその仕事を主として担うことになるのは、非ノーメンクラトゥーラの民主派・改革派よりはむしろ、昨日までは最上層なりそれに近いノーメンクラトゥーラの一員だったエリツィンでありサブチャークであり、またノーメンクラトゥーラ内部の改革派たちだったのである。ノーメンクラトゥーラ層やその息子・娘たち・かれらの友人たち、ノーメンクラトゥーラ周辺のインテリやその二世たち——そうした人々とは完全に無縁な場で形成された「純粹」民主派となると、その出番はいちじるしく限定されていた。

つまり、ノーメンクラトゥーラは立去りはしなかったのだ。

その事実を、①地方レベルでは、筆者じしんその一端を見聞した、サンクト・ペテルブルク市を例にして見ておこう。また、②全国レベルでは、ロシ

アとアメリカの研究者がさきごろ発表した共同報告などを例にとりつつ、大まかな絵柄をスケッチしてみよう。

それをつうじて、③ノームクラトゥーラとは何であったのか、ソ連型一党支配制の中核ともいべきこの制度の本質はどこにあったのか、いいかえると、かような制度を核として成立していた共産党という組織の本質はいつたいどこにあったのか、にも話をすすめるつもりである。

そして、さいごの論点を取りあげるさいに、主たる舞台まわし役をつとめてもらおうとかがえているのが、副題にあげたS. ハンデルマンの著作である。

\* \* \*

それでは、共産党一党支配制が崩壊するなかで、「全ロシアでもっとも民主的」と称される市政をいち早く実現したと評価の高かった、サンクト・ペテルブルク市議会の場合に、ノームクラトゥーラがどこへ行ったのか、をいちべつ一瞥してみよう。

表1は、筆者じしんがサンクト・ペテルブルク市に滞在中、調査・作成した1993年8月現在のサンクト・ペテルブルク市指導部の構成である。

この表を見わたしていただくなら、標題にかかげた問いにたいして、基本的には、すでにここに回答が与えられているといっても、性急のそしりはうけないですむのではなかろうか。

表1. ノーメンクラトゥーラはどこへ行った？

——サンクト・ペテルブルク市の例——

(単位：人，1993年8月現在。筆者作成)

	市 議 会		市 役 所	
	市 議 員	アバラート 直属幹部職員	市長, 副市長, 市長代理	アバラート 直属幹部職員
総 数	360	123	7	53
そのうち前共産黨員	280	107	7	38
そのうち 《ノーメンクラトゥーラ》	269	100	7	35

(『サンクト・ペテルブルク観察事典』[準備中]の項目「ノーメンクラトゥーラ」の素材から。以下、次号)

## Where has gone the NOMENKLATURA:

an essay, inspired by S. Handelman's

《Comrade Criminal: Russia's New Mafiya》

(New Haven and London: Yale University Press, 1995)?

Suzuki Hakushin

Western leaders and mass media, including their Japanese counterparts, quick to claim “victory” in the cold war, never took a close look at the “losers”. It was assumed that Russians would take to Western forms of economic and political development as eagerly as they had bought Western jeans and rock music tapes on the black market.

The West's, that is, our biggest mistake was to have expected more than Russia was able to become. We did not fully understand how sick Soviet society was.

There was, on top of everything else, no trusted new “elite” to replace the old. A truly non-partisan civil service has always eluded Russian governments. And the so-called democrats or reformers in power are themselves nomenklatura people, their children and their acquaintances.

In a word, the system never collapsed after August, 1991, despite the appearance.

S. Handelman, Canadian journalist and author of 《Comrade Criminal》, elucidates, in his work, that the bureaucrats and managers of the former regime acquired new capital and political strength by exploiting the

legal vacuum left by departing Communist authorities.

Thus, a post-Soviet mafiya emerged, in incorporating ①the most entrepreneurial element of the former nomenklatura and ②the gangster capitalism of the new. The Comrade criminal—the personification of this new force that combines the just mentioned two elements—is now setting the rules of game in Russia.

Inspired by Mr. Handelman's sardonic insight, I try to trace here, both on local and national level, though in a very sketchy way, how the nomenklatura survives. And by drawing this sketch, I want to clarify the essence of the organisation, that had been called the Communist Party of the Soviet Union.